町より申出候言葉にて御座候、原三郎左衞門と申者、大坂太閤樣の御時、御廐付の奉公仕りし者にて候處、病身に罷成候間、浪人いたし、後に六條の遊女町を取立申候へども、彼三郎左衞門義は、太閤樣御出馬の節は、度々御馬の轡を取候者にて候、依之其砌此子細を被存候人々は、三郎左衞門異名を轡と申候、然る間、其頃京都伏見などの若き侍衆中は、傾城町へゆかんといふ替ことばに、轡がもとへゆかふと被申しより、いつとなく、傾城屋の總名の樣になり候と承候と申上る、

〔嬉遊笑覽九 娼妓〕轡は傾城屋の異名なり、箕山なども名目の來由を云らずといへり、或云、原三郎左衞門は、太閤の馬の口取なれば、それが取立たるによりて云かいふ、又一說には、伏見の遊女町十文字なるといふともいへり、三郎左衞門、馬の口取といふこと慥ならず、又伏見などよりいひ出て、廣くわたるべき理もなし、信長記に、織田右馬助といふもの、人の賄をとりければ、憑を再三取申けるに信長卿、錢ぐつわはめられたるかうまの助人畜生と是をいふらむ、と一首の狂歌を遊ばして送られけるとみえたり、是慾心のみにて、漢土にいはゆる亡八の義なり、金銀を贈るを轡をはむるにとりていへる名なり、

〔一目千軒〕忘八之事 井夜具の事

唐土にては娼家といふ、又孤老或は招夫など有、是今いふ女郎屋なり、もろこしにては、日本のごとく、揚屋女郎屋の差別なし、今亡八とかくは略字也、くつはとはよばず、只女郎屋といふ、くつはといふ事未詳、扨女郎揚屋極まれば、夜具をはこぶ、此入もの皮つゞら長持など也、此紋はくつわの印なり、付札大きなるは太夫、ちいさきは天神の云るし也、

〔我衣〕賣女ハ渡世ノタメニ美目ヨキ女ヲ買取テ、白粉紅粉ヲヌリ、其色ヲ增シ、綾羅ヲキセテ人ヲアザムキ、香具ヲ帶テ臭氣ヲ去リ、諸人ヲ落シ穴ヘ入レ、一生ヲアヤマラセ、或ハ命ヲモ損スル不仁ナル家職ユヘ、世ノ人別トシテ交ラズ、是ヲ亡八ト云、孝弟忠信禮義廉耻ノ八ツヲ忘レタルユ